



## 夢を持とう

浅井恒雄

1992年に東京で「第1回科学技術ジャーナリスト世界会議」が開かれて、今年はちょうど20年になる。当時は科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）の設立が皆の夢だったが、これをきっかけに2年後に実現した。世界連盟の会議も各国で開催されるようになり、ジャーナリスト塾をはじめ、科学ジャーナリスト賞を設ける等、当初の企画は順調に進展している。体が思うに任せず理事の退任を決断したが、これまでの御協力を感謝し、今後のJASTJのさらなる発展を期待したい。

人生には予測できない出来事がある。生死の境にある我が身となって、初めて経験する判断の分かれ目。手術をしなければ血管が破裂して死ぬが、手術をしても足が麻痺して、最悪事態、車いすのやっかいになる。つまり何もしなくても、何時までかは分からないが死ぬまで生きられる。しかし、手術のリスクを冒して車いすの生活をするかどうかを考えどころ。多くの人は「天命を待て」と他人事のように言うのだが…。予測されない事態に、専門家（ここでは医者）を信じることも大事だ。

私の体験で予測できない出来事と言えば、終戦による北朝鮮からの脱出。この時は父親の決断だった。帰国直後の二度にわたる大水害の被災。そして退職後の8回にわたる大手術。いずれも予想できない、決断の要る事件が続いた。山津波ともいう大水害の時は父親に板きれ一枚を渡され、二階の屋根の上で「何とか生き延びてくれ」と言われた。二度目の水害では屋根までつかる大洪水の最中、大雨の中でさらに火災が発生、

ドラム缶に火がついて流れ、爆発・延焼、火攻め水攻めで観念した。

水害、火災、地震、雷、津波、竜巻、山崩れ等の天災、そして最近では列車、航空機、自動車の事故、それに原子力、放射線等々の人災も加わり、予測できない何かが起こっている。取材や病気で多くの放射線も浴びた。初めから失敗を望む人は誰もいないが、その先が読めないから心配になるのは当然だ。予想できない事が起こった時は、諦めるか、続けて挑戦するかどうか。最善を尽くしてやるしかない。

原子力開発もこれまで、最善を尽くしてやってきたと思う。しかし、思いもかけない事故が起きた。多くの人が安全のために努力してきたのだが、ここで挫折してはならない。天災であれ人災であれ、よりよい技術を生み出す挑戦を続ける。そこに解決の道があり、進歩が生まれるのだらう。

最近では悪いことばかり続き、心にゆとりがなく、夢がなくなった。それに物事が信じられない風潮も問題だ。何でも信じればよいわけではないが、何も信じられないというのでは夢は語れない。日本の科学・技術は人類の発展・向上と経済社会の進展に大きく貢献してきた。研究開発は夢を描くことから始まる。このままでは世界に後れをとることは必定だ。皆さんも新しい夢をどんどん発掘・発信してほしい。できれば研究開発の総元締め「科学技術庁」の復活にかけて皆で意気投合できたらと思うのも私の夢。

(JASTJ前理事・元事務局長)

### CONTENTS

巻頭言 夢を持とう	1
総会報告／活動方針	2
科学ジャーナリスト賞2012	
贈呈式・受賞者一覧	4
選考経過	5
大賞受賞者の言葉1	6
大賞受賞者の言葉2	7
優秀賞受賞者の言葉	8

選考を終えて	9
例会報告(3月) テラヘルツ波	10
例会報告(4月) 産科医療補償制度	11
会員だより1 英国報告	12
会員だより2 金環食とリスク情報共有	13
追悼記／Web編集長から	14
JASTJをサポートする賛助会員一覧	15
事務局だより	16

## 高まる科学ジャーナリズムへの期待

JASTJは5月15日、日本記者クラブで2012年度の通常総会を開きました。出席者は34人で、欠席者のうち33人が議長に委任しました。正会員数は240人で定足数はその5分の1つまり48人です。総会では、昨年度の活動報告、決算報告、監査報告、今年度の予算案の説明と報告がなされ、全会一致で承認されました。

### ■ついに赤字決算を脱出

昨年度の決算については、6年ぶりについに65万円の黒字となりました。2006年度に45万円の赤字を出したのを皮切りに、07年度には280万円の大赤字、08年度が92万円の赤字、09年度に80万円の赤字、そして10年度は予定外の事務所の引越しが発生して50万円の赤字でした。

今回黒字化できたのは、賛助会員に新しいメンバーが加わっていただけたことと、理事会や例会の会場費用、JASTJ賞審査に関わる諸経費、通信費、事務費などの経費節減に努力したことが理由です。会員が着実に増えていることも貢献しました。

今年度は、福島原発事故の事故調査委員会の報告書を検証するプロジェクトなど、各種の検証プロジェクトの活動が活発化する方向です。このため再び赤字に転落する可能性もあり、事務局としては引き続き気を引き締めて経費削減に努力していきたいと考えています。

### ■活発だった各種活動

昨年度の活動については、東日本大震災の直後だっ

たこともあり、講演会や勉強会など全般に極めて活発でした。講演会では会員外の方が多く参加するなど、参加者数も例年に比べて多く、活発な議論が展開されました。第7回目となったJASTJ賞には大震災関連をはじめ76もの作品が寄せられました。力作が多かったため選考が難航し、大賞が2作品という異例の形になりました。

名古屋大学主催の「あいちサイエンスフェスティバル」にも全面協力し、最終日のシンポジウム「原発報道を振り返る」では中心的な役割を果たしました。今年も原発事故関連のシンポジウムで、名古屋大学と協力する計画です。また、カタール・ドーハで昨年6月に開かれた科学ジャーナリスト世界会議には2人の理事と会員、賛助会員らが参加してJASTJの存在を示すことができました。

関西学院大学丸の内キャンパスで開いている「科学ジャーナリスト塾」については、青山学院大学社会情報学部とも協力するなど事業規模が拡大しています。このため、JASTJはこれまでの「共催」という立場から「協力」という形をとることにしました。科学ジャーナリスト塾は第11期から、サイエンス映像学会(SVS)の単独の主催になります。

ジャーナリストは現場取材がすべての基本です。このためできるだけ見学会を数多く開催したかったのですが、昨年実施した見学会はアサヒビールの工場見学だけでした。これについては反省点の一つとして、今年度は増やすように努力したいと思います。

## 多様な発信をめざして

JASTJ会長 武部俊一

JASTJはこの7月で18歳になる。もう子どもでもない。科学ジャーナリズムを深め、科学コミュニケーションの輪を広げるために、さらに多様な発信・情報収集をこころがけよう。

まず重視したいのはウェブだ。若い世代を誘い込み、幅広い議論を展開する広場として力を入れなければならないのに、わがウェブページはまだ投資に見合う活用がされていない。ふえているとみられるアクセスにこたえて充実を図るために「ウェブ編集長」を新設した。

例会や検証委員会などの議論内容をすばやく、魅力的に伝え、多様な意見を反映できる場としたい。世の中のさまざまなリスク情報、未来技術情報を日常的に持ち寄って評価するようなジャーナリスト版TA(テクノロジー・アセスメント)の場があってもいい。ツイッターやフェイスブックなどを使いこなすことによって、その功

罪にも目が向けられる。

例会や見学会も多様化して、第一線記者や映像制作者、編集者たちを誘い込むような内容にしたい。このために企画担当の理事の層を厚くした。今はやりの「アウトリーチ」に苦心している研究者や研究組織が多いようだ。そういうところと呼应して、お互いの発信力を高めるのもいいのではないか。社会全体で科学・技術を見守っていかなければならないのだから。

いくらウェブが盛んになっても、活字メディアの価値が下がることはないと信じる。この会報も、ウェブと連携しながらも、ウェブにはない問題提起やニュース分析の記事を載せたい。まとめたら1冊の本になるような連載コラムなどを載せられないか。さらに夢を広げると、JASTJ版の『科学年鑑』をウェブや出版物で世に送り出せればいいと思っている。

2011年度 決算報告書 (2012年3月末) 2012年3月31日現在

収入		支出	
前年度繰越金	¥1,527,835	月例会 (例会10回・見学会1回)	¥554,672
会費収入	¥2,328,000	会議費 (理事会等)	¥58,707
賛助会員 (15社)	¥2,220,000	総会 (会場費等)	¥263,880
		会報刊行費 (4回発行分)	¥551,890
雑収入	¥35,000	通信費 (電話・パソコン保守等)	¥145,446
内訳		人件費 (事務局人件費)	¥595,440
会員外参加費	¥86,000	事務費 (郵送・文具・OA機器等・振込手数料等)	¥94,310
贈呈式懇親会	¥106,000	事務所負担金	¥500,000
親睦会参加費	¥22,200	H P作成・管理費	¥500,000
図書販売(含会報販売)	¥0		
寄付	¥202	その他支出	¥0
利子	¥0	[経常経費小計]	¥3,264,345
その他	¥0	検証プロジェクト	¥13,650
		P国際化対応 (世界連盟費会費未決済。来年度に今年度分繰越)	¥8,024
		P科学J賞準備運営 (人件費・会議・書籍・郵送など)	¥863,365
		[プロジェクト小計]	¥885,039
単年度収入計	¥4,797,402	単年度支出合計	¥4,149,384
総収入	¥6,325,237	収支	¥648,018
		次年度繰越金	¥2,175,853

2012年度 予算計画

収入		支出	
前年度繰越金	¥2,175,853	月例会	¥550,000
会費収入	¥2,300,000	会議費	¥72,000
賛助会員(15社)	¥2,400,000	理事会	¥30,000
		総会	¥560,000
雑収入	¥40,000	会報刊行費	年4回
内訳		通信費	郵便、電話、など
会員外参加費		事務局人件費	¥150,000
		事務費※1	郵送・振込手数料・文具・OA機器など
		事務所負担金	¥200,000
		H P作成・管理費	¥500,000
		予備費	¥68,000
[会費・雑収入小計]		上記計	¥3,280,000
		検証プロジェクト	¥100,000
		P国際化対応※2	世界連盟費(昨年度分含)など
		P科学J賞準備運営※3	会場費・書籍・郵送・人件費など
		[プロジェクト小計]	¥1,460,000
単年度収入計	¥4,740,000	単年度支出合計	¥4,740,000
総収入	¥6,915,853	単年度収支	¥0
		次年度繰越金	¥2,175,853

※1 PC 購入予定 ※2 昨年度分会費を計上 ※3 昨年度まで会場費は総会費に計上

■増加傾向の会員数

4月30日現在の正会員は240人です。昨年度の退会者数が8人で入会者が15人と、一般会員数は順調に増えています。医療、食品、放射線などの分野で最近、「科学コミュニケーション」という言葉がよく聞かれます。このことと、JASTJの会員の増加傾向は大きく関係しているのだと思います。

会員数の増加にともない、活動分野も広がりつつあります。このため今回の総会で、理事の定員を「25人以下」から「30人以下」に拡大しました。多くの人材を理事会に取り入れて、より充実した活動を展開していきたいと考えます。とくにデジタルメディアに強い人が必要だと考えています。会員の中で、ネット技術やデジタルメディアに強い人がおられましたら、ぜひ、理事会に加わってください。

賛助会員も少しずつですが増えています。昨年度から今年度にかけては、東京電力とパナソニック電工が賛助会員を退会・休会される一方で、ロート製薬、ノバルティスファーマ、鷗友学園女子中学高等学校に新

今期の理事および監事一覧

理事	武部俊一(会長)
	佐藤年緒(副会長・企画)、瀬川至朗(副会長・科学ジャーナリスト賞)、高木勲生(副会長・会報編集長)
	飯島裕一(地方)、漆原次郎(WEB)、大江秀房(出版)、隈本邦彦(企画・検証P)、小出五郎(検証P・科学ジャーナリスト賞)、柴田鉄治(科学ジャーナリスト賞・検証P)、高橋真理子(国際)、滝順一(科学ジャーナリスト賞)、林勝彦(科学ジャーナリスト塾)、畑祥雄(科学ジャーナリスト塾)、引野肇(事務局長)、藤田貢崇(事務局長補佐・WEB編集長・会報)、牧野賢治(国際)、室山哲也(企画)、元村有希子(企画・国際)、桃木暁子(地方)、山本威一郎(会報・企画・検証P)
田村真紀夫(科学ジャーナリスト賞・新任)、西野博喜(会報・新任)、保坂直紀(企画・新任)、横山裕通(企画・新任)	
監事	倉本昌昭、小出重幸(新任)

(注) カッコ内は担当および新任(何もない場合は再任)。なお、浅井恒雄・小出重幸の各氏は理事を、長辻象平氏は監事を退任した。

規入会していただきました。また、日立製作所からは会費の口数を増やしていただきました。会議を長期的に安定して運営して行くには、あと数社ほど賛助会員を増やしたいと思っています。(事務局長 引野肇)

## 華やかでなごやかな雰囲気で開催 大賞は下野新聞の茂木信幸氏とNHKの増田秀樹氏 優秀賞は中山由美、山崎正勝の2氏に

日本科学技術ジャーナリスト会議が優れた科学ジャーナリストの仕事や科学者たちの啓蒙活動などを顕彰する制度を設けてから今年で7年目。「科学ジャーナリスト賞2012」の受賞者が下記のように決まり、5月15日、東京・内幸町のプレスセンター10階ホールで今年も華やかに、なごやかに、いつものあたたかい雰囲気に包まれた贈呈式が行われた。

室山哲也理事の司会ではじまった贈呈式は、冒頭、柴田鉄治理事から選考経過の報告があり、つづいて贈呈式に入った。

まず、選考委員の米沢富美子さんが壇上に上がり、優秀賞に輝いた朝日新聞「プロメテウスの罠・第3部『観測中止令』」の中山由美さんの業績を称え、祝福したあと、JASTJのロゴマーク入りのレリーフと協賛企業から贈られた数々の副賞が手渡された。次いで、選考委員の浅島誠さんが、同じく優秀賞に輝いた「日本の核開発：1939～1955—原爆から原子力へ」の著者、東工大名誉教授の山崎正勝さんに称賛と祝福の言葉を贈り、レリーフと副賞を手渡した。

科学ジャーナリスト大賞の表彰に移って、まず選考委員の村上陽一郎さんから下野新聞「あなたの隣に 発達障害と向き合う」の取材班代表の茂木信幸さんと山崎一洋さんに称賛と祝福の言葉とレリーフなどが贈られた。つづいて選考委員の相澤益男さん



贈呈式で賞の総評を述べる選考委員の白川英樹さん (撮影 高木毅生)

からNHK「ETV特集 原発事故への道程」前後編のチーフプロデューサーである増田秀樹さんと松丸慶太さんに、それぞれ賞賛と祝福の言葉とレリーフなどが贈られた。

最後に、選考委員の白川英樹さんが全体を通じての総評を述べられ、出席者全員で乾杯。そのあと、くつろいだ雰囲気の中で受賞者のあいさつを聞いた。

この受賞者のあいさつが、いつものことながら実に感動的だった。謙虚な姿勢の中にも作品にこめた努力と熱意がひしひしと伝わってくるもので、科学ジャーナリスト賞を創ってよかったとつくづく感じさせてくれる瞬間でもある。

(JASTJ理事 柴田鉄治)

### 科学ジャーナリスト賞 2012 受賞者一覧 (敬称略)

大賞	日本放送協会 (NHK) 文化福祉番組部チーフプロデューサー <b>増田 秀樹</b> 「ETV 特集 原発事故への道程」(2011年9月18日、25日)の番組に対して
	下野新聞社 発達障害取材班代表 <b>茂木 信幸</b> 「あなたの隣に 発達障害と向き合う」(2011年1月11日～6月27日)の報道に対して
優秀賞	朝日新聞社 記者 <b>中山 由美</b> 「プロメテウスの罠・第3部 観測中止令」(2011年11月7日～11月23日)の報道に対して
	東京工業大学 名誉教授 <b>山崎 正勝</b> 「日本の核開発：1939～1955—原爆から原子力へ」(續文堂)の著作に対して

選考委員 (50音順、敬称略)

【外部委員】 相澤益男 (総合科学技術会議議員)、浅島誠 (東京大学名誉教授、日本学術振興会理事)、白川英樹 (筑波大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞者)、

村上陽一郎 (東洋英和女学院大学学長)、米沢富美子 (慶応大学名誉教授)

【JASTJ委員】 小出五郎、柴田鉄治、瀬川至朗、滝順一、武部俊一

## 甲乙つけがたく大賞が初めて二つに

### 3.11 で作品の質・量とも高まる

2012年度の科学ジャーナリスト賞に寄せられた自薦他薦の候補作品は計76編あった。内訳は新聞6、テレビ・映像13、書籍50、ウェブその他7である。昨年の65編に比べれば、かなり増えたともいえるが、一昨年の81編に比べれば、やや減っているわけで、決して数が多かったとはいえない。

しかし、今年は粒ぞろいで最終選考に残す一次選考がなかなか難しく、紙一重のところまで落とさざるを得ない作品も少なくなかった。そうして残った12作品について、4月14日、最終選考委員会を開いて、授賞作品を決めたのである。12作品の内訳は、新聞

2、テレビ・映像

4、書籍6だった。

今年の作品が粒ぞろいであった理由の一つは、3・11東日本大震災と原発事故のせいだろう。つまり、地震も原発事故も科学ジャーナリストが活躍すべき科学ニュースであり、この一年間は圧倒的な量の科学ニュースが氾濫したといってもいい年だったのだ。

もちろん、その

分、さまざまな他の分野の科学ニュースが減ったわけだから、応募作品のバラエティーは少なくなったともいえるが、科学ニュースの量が格段に増えれば応募作品の質が高まることは当然の結果だといえよう。

12作品について、10人の選考委員がそれぞれ意見を述べたうえ、ウェートをつけた投票をして集計したところ、大賞の候補に、NHKの「ETV特集 原発事故の道程」前後編と下野新聞の「あなたの隣に発達障害と向き合う」の二つが浮かび上がった。

今年はテレビ・映像部門に力作が多く、最終選考に残った4本はどれもなかなかのものであったが、昨年一昨年もNHKが大賞をとっているの、「3年

連続はどうか」という声もあった。しかし、原子力開発のそもそもから説き起こし、どこに問題があったのかを掘り下げた秀作で、「やはり、いいものはいい」と候補に残された。

下野新聞の記事は、いま教育界で大きな問題になっている発達障害を实名、写真入りで報じたインパクトのある連載記事で、これも十分、大賞に値すると、候補に残されたのである。

これまで大賞は一つとしてきたので、どちらを採るか、いわゆる決選投票をしたところ、またまた同数に割れたのだ。そこで論議の結果、テレビと新聞、

原発ものとそうでないもの、ということ、今回はとくに二つとも大賞を出そうとなったのである。

朝日新聞の「プロメテウスの罫」は、いわゆる「発表依存」から脱して、新聞独自の力で掘り起こしていった記事として評価が高く、シリーズの中で最も科学ニュースの色彩が濃いというインパクトも大きかった



笑顔の受賞者（前列左から山崎さん、一人置いて増田さん、茂木さん、右端が中山さん）と選考委員（後列左から相澤さん、3番目が村上さん、5番目が米沢さん、6番目が白川さん、7番目が浅島さん）  
(撮影 高木勲生)

「観測中止令」を優秀賞に選んだ。

このところ部門別では新聞が科学ジャーナリスト賞から遠ざかっていたので、新聞が賞を二つも獲たことは、新聞界にとっては嬉しい話だろう。

書籍の中からは、「日本の核開発：1939～1955」が選ばれた。「啓蒙書というより学術書のような」という意見もあったが、原子力開発の原点をしっかりと見つめなおし、もともとは核開発なのだという科学史をしっかりと学びなおすことは、いま、とても大事なことだという意見のほうが多かった。

「NHKのETV特集と重ね合わせてみると、いっそう意義深い」という、ある選考委員の言葉も紹介しておきたい。  
(JASTJ理事 柴田鉄治)

## 原発事故 悪意なき悪を追う 増田秀樹

チェルノブイリ原発事故の時も、ソ連政府が情報公開に踏み切ったのは随分時間がたってからでした。「ただちに健康に影響を与えるものではない」という官房長官の言葉に象徴される日本政府の姿勢は、洋の東西を問わず政府というものの常で、怒りは覚えませんでした。しかし3月17日に警視庁の高圧放水車が出動すると聞いた時には驚きました。安保闘争でデモ隊に水を浴びせていたあの牧歌的な車でメルトダウンを防げると本気で思っているのだろうか。事態を正確に把握し、的確に処置する能力がこの国には無いのではないかと、底が抜けたような恐怖感にとらわれました。私たちETV特集班は事故発生の日後に現地に入り、30キロメートル圏内で汚染調査を始めました。大本営発表に堕してはいけないという意識もありましたが、それ以上に、政府や東京電力には頼りたくても頼れないという焦燥感に突き動かされていたと思います。

取材はETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図」というシリーズで番組化しましたが、汚染の過酷な実態がわかるにつれ無念さがこみ上げてきました。そして地震大国である日本に多数の原発が作られた過程や「安全神話」なるものが誕生した経緯を歴史的に検証するの必要を感じました。事故が収まってからなどと悠長なことでなく、出来るだけ早く。それがETV特集「原発事故への道程」を制作しようと思ったきっかけです。



選考委員の相澤益男さんからお祝いの言葉を贈られる増田さん（左）と取材班の松丸慶太さん  
（撮影 高木勲生）

ディレクターに起用した松丸慶太、森下光泰という二人の中堅には「戦犯を捜し出して溜飲を下げるような安っぽい番組は作らない」という話をしました。放射能で日本をめちゃくちゃにしてやろうと考えるような悪人はおらず、皆、資源小国の繁栄を願っていたはず。それなのに、結果として100万人もの住民の

生活を根こそぎにしてしまうような暴力が成立するのはどうしたことか。日本社会が内蔵する「悪意なき悪」を摘出したというのが、この番組の狙いでした。

取材を始めてほどなくして、松丸が凄惨な史料を見つけてきました。それが今回



（撮影 高木勲生）

の中心資料となった「原子力政策研究会」の100時間に及ぶ録音テープです。科学技術庁の官僚で、日本の原発開発の中核にいた伊原義徳さんが自宅に保管されていました。この資料が貴重なのは、原子力政策を担った官僚、研究者、電力会社、メーカーなどの重鎮が「内輪の会合」ならではの本音トークをしている点です。会合が開かれたのは1985年から92年にかけて。原発事故が起きた今なら何とでも言えますが、メルトダウン事故を“予想だにしない”時代に語られたバイアスのかからぬ言葉ゆえに史実に迫る一次資料になり得ました。そこから、いったん巨大プロジェクトが動き始めるとマイナス面を口にする者を黙殺して突っ走る日本人の集団的性向が浮かび上がってきました。太平洋戦争の時の“いつか来た道”と重なって見えませんでした。

破局の経験から私たちが学ぶことは、単に原発の防潮堤を高くして津波に備えるという事だけではないはず。医療、バイオテクノロジー、宇宙開発…原発以外の先端技術についてもリスクヘッジが出来ているのかあらためて検討してみないと、悲惨な犠牲にむくいた事にはならないと今は考えています。

この栄えある賞をいただいてからというもの、「科学ジャーナリスト」という名前に瓦版屋の末裔としか思っていない自分としては冷や汗をかきっぱなしです。しかしかくなるうへは、賞の大きさに少しでも近づけるよう、事実を取材し、伝えるという当たり前のことですが難しい仕事に、愚直に取り組んで参りたいと思います。

誠に有り難うございました。

（NHK文化福祉番組部チーフプロデューサー）

## ルポに徹し事実を描く 茂木信幸

下野新聞社として初めて応募した今回の科学ジャーナリスト賞2012で大賞を受賞させていただきました。取材班（山崎一洋、荻原恵美子、阿久津信子の3記者）の各メンバーとともに、過分なる評価をしていただいた日本科学技術ジャーナリスト会議にあらためてお礼と感謝を申し上げたいと思います。

発達障害は、従前から温めていたテーマではありません。2011年初頭から始める大型連載企画を教育問題で取り組む方針が決まり、その材料探しとして取材班が10年秋ごろに小中学校の現場に入ったことがきっかけでした。そこでメンバーが「発達障害の子どもたちの対応で先生たちが非常に苦慮しているらしい」という報告を上げてきたのです。

医療関係の取材を多少経験したことがあるとはいえ、発達障害はまったくの門外漢。取材班のメンバーも同様でした。が、発達障害に関する書籍を何冊か目を通すうち、「この問題を紙面でいち早く取り上げて社会に訴える必要があるのではないか」と考え始めました。つまり、これから間違いなく顕在化するだろう発達障害の問題を半歩先行く形でキャンペーン報道し、障害特性への理解や早期発見、社会の受容などに結びつけることができないか、という観点でした。発達障害以外にもいくつかのテーマが取材班から上がりましたが、最終的には「子どもが主たる取材対象になれば社会的な関心も高まるだろう」などの理由から発達障害をテーマとすることに決めました。



選考委員の村上陽一郎さんから祝福される茂木さん(左)と取材班の山崎一洋さん (撮影 高木勲生)

長期連載を始める際、当時の編集局長らと取材方針について次のような基本原則を確認しました。一つは「徹底したルポルタージュ」であり、もう一つは

「可能な限りの実名報道」でした。発達障害の特性などを読者に分かりやすく伝えるため、障害のある小中学生や大学生、成人らの日常の姿をありのままに描きたい。それを「事実」として読者に受け止めてもらうには、実名報道が最大の担保になるという判断でした。

権力犯罪や公的機関の不正を対象とした調査報道やキャンペーン報道ならば、何も取材対象者の実名報道の成果をことさら強調することはありませんし、むしろメディアとして当然なことでしょう。障害を持ち、社会的には弱者のカテゴリーに入るかもしれない人たちから実名報道の理解や承諾を得る作業は、決して容易なことではありませんでした。取材班のメンバーが何度も自宅を訪れ人間関係を構築したものの、原稿化する直前になって「もう少し考えさせてほしい」と断られたことも一度や二度ではありませんでした。逆に、取材に快く応じていただいた発達障害児者やその家族は、きちんとその障害と向き合い生きていくことを既に心に決めているかのような様子でした。



(撮影 高木勲生)

長期連載は2011年1月から6月まで本紙で報道しました。まさに連載中の3月11日に東日本大震災が発生し、発達障害取材班はそのまま震災取材班に組み込まれ、私自身もその日から震災報道の担当デスクへと切り替わりました。1カ月後、長期連載をどのように続けるのか取材班のメンバーと語り合いました。「とにかく一つの形にしてこの連載をまとめよう」。4月中旬に発達障害取材班は復活し、何とか6月に最終部の連載と特集紙面を報道することができました。連載は大幅な予定変更を余儀なくされ、取り組めなかった題材もいくつか残りました。大賞受賞が、再び取材班の背中を押すような気がしてなりません。

(下野新聞社 発達障害取材班代表)

## 地球の果てまで追いかけて 中山由美

「科学ジャーナリスト」なんてどうも似合わない。山を歩き、海に潜り、通算1年8カ月、2度の南極取材、今夏は北極再訪で氷上生活と、極地に行く「極道の女」。科学記者というより、科学者を地球の果てまで追いかけてきた記者ではある。

今回迫ったのは気象研究所の研究者だ。「ネイチャーの論文掲載を止められた」との噂が端緒だった。最初は警戒された。原発事故の騒動のなか放射能観測と発表が組織によって阻まれた事実を「洗いざらい追及する」と説得し、関係者一人ひとりに何が起き、誰が何を話したかを丹念に聞いて歩いた。

連載「プロメテウスの罠」では、そのやりとりと場面を詳細に再現した。「センセーショナルな数字が出て混乱を引き起こしたらまずい」などと語る官僚の名前と年齢も記し、一般感覚とのずれを浮き彫りにした。連載中も取材は続き、時には記事に対する省庁の反応までも書き込んだ。推理小説のような展開に読者から「続きが気になる」と手紙が届き、休載した日の朝は「圧力があって止められたのか？」

などと会社に80件以上電話が来た。反響は私の筆力によるものではない。普通の記事で書ききれない細部までこだわる、この企画ならではの力だ。

今回の受賞で「発表に頼らない」「実名で暴いた」と評価を頂いた。ありがたい言葉だが、記者としてはそうであるべき、当たり前なのさ。「当局によると」と責任の所在をぼやかすことを容認してきた——それをむしろ自戒しなくてはいけない。これまでにない反響の大きさに驚いたが、裏を返せば、今までの記事が自己満足に終わっていたのではと考えさせられる。不似合いながらも、名誉ある賞を頂いてしまった以上、その名に恥じぬ報道を続けていかななくてはと今、使命と重責を痛感している。(朝日新聞記者)



(撮影 高木毅生)

## 公開資料から原子力の実像に迫る 山崎正勝

「科学ジャーナリスト賞2012」の受賞は、私にとって予期しないことでした。私はジャーナリストではなく、今回出版した本も、一般読者を一応は想定していましたが、基本的には実証的な研究書、専門書でした。

この本の特に戦後編で目指したのは、1980年代の後半からアメリカなどで始まった冷戦期科学史の方法論を日本の戦後科学史の分析に生かすことでした。冷戦の時代には、東西陣営の双方で、政治的な宣伝戦、プロパガンダが展開されました。しかし、冷戦終結後に米ソなどで公開された資料からは、戦後の科学技術についても、その虚像と実像が明らかになりました。

米ソの影響を強く受けていた日本では、どうだったのか。原子力問題は、冷戦の影響がもっとも鋭く出た分野の一つでしたから、国内外で公表された資料を使えば、その新しい歴史を描くことができるのではないか、そう考えました。

戦後の日本の原子力の歴史の理解に関しては、今なお論争的な議論が多く存在しています。そのため、

執筆に際しては、憶測を避けて、公表された資料や当時の議事録などを使って具体的な証拠を示しながら書き進めるように心がけました。

福島原発事故以降、原子力問題への関心が高まり、さらに脱原発の声も広がりました。このような中で、私の本はそれほど目立った主張をしているわけではありませんので、どのように本が読まれるかには、懸念もありました。

しかし、このたび、日本科学技術ジャーナリスト会議の皆様方、特に審査委員の皆様方から評価を受け、このような賞をいただくことができ、たいへん嬉しく、また、光栄に存じております。拙著を推薦していただいた方々をはじめ、日本科学ジャーナリスト会議の皆様方に、深く感謝申し上げます。

(東京工業大学名誉教授)



(撮影 高木毅生)

## 選考を終えて

### 驚くべき証言で迫る「原発事故への道程」

東電の原発事故は、真相に迫ろうとする科学ジャーナリスト魂を大いに奮い立たせたと思う。大賞を射止めたNHK「ETV特集 原発事故への道程」の増田さん、森下さんは、幸運にも日本の原発導入に何らかの関わりがあったとされる官僚や学者たちの肉声の記録に出会う。そこには非公開の「原子力政策研究会」で交わされた驚くべき証言が残されていた。これに綿密な調査結果が織り交ぜられ、このドキュメンタリーが秀逸な作品に仕上げられた。日本の原子力政策がどのように始まり進んできたか、その描写は生々しい。経済性重視が先行し、ひとり置き去りにされたのが、安全性だ、と私も思う。しかし、この研究会で繰り返されていたことにも、もう少し批判の目が向けられてよかったのではないかな。

(総合科学技術会議議員 相澤益男)

### 特筆すべき地方ジャーナリズム

自然なことだが、災害・原子力事故関連の作品が多かった。どれも大事な訴えを持った良心的なものとの印象は持ったが、日本の資源安全保障との関連にまで踏み込んだ、総合的な視点からの切り込みに乏しいことは否めなかった。大賞に輝いた下野新聞のキャンペーンは、科学・技術とどう絡むのか、という点で一抹の疑念はあったが、もともと発達障害が「医学」的治療だけで完結しない問題であり、むしろそれぞれのコミュニティがどう取り組むか、というところに解決の鍵があることから見れば、医学的取り扱いではなく、地域の姿への真摯で信頼感に溢れた手法が、地方ジャーナリズムの特長を見事に表したものとして、特筆に値すると感じた。それが、選考の席上で強く推した理由でもあった。

(東洋英和女学院大学学長 村上陽一郎)

### 実名報道で官の無責任あぶりだす

朝日新聞の連載「プロメテウスの罫」では、原発事故以後に「知られていなかった事実」を掘り出し、実名で報じた点が、企画全体として高く評価される。特に「観測中止令」では、放射能の観測を巡る役所の「官僚的で無責任な対応」を明らかにした。丹念な取材で登場人物たちに実名で発言させる点が良い。ジャーナリストという職業は、「真実を伝える」ことが基本にあるが、時代によりテーマによってはそれが困難な場

合もある。さまざまな形の圧力がかけられたり、ネットでバッシングされたりという、陰湿で執拗な妨害によって、書き手を精神的に追い込む手段もある。原発や放射能関連の問題はそのようなテーマのひとつと言えるだろう。その観点からも今回のような報道は意義があり、ぜひ勇気をもって続けてほしい。

(慶応大学名誉教授 米沢富美子)

### 日本の核開発の実態明らかに

3.11は科学と政治、科学者のあり方、科学と社会の関係などを考える深刻な機会となったが、今回の選考ではそうした根本問題を考える上で山崎正勝氏の「日本の核開発:1939~1955」に注目した。ドイツでウラン核分裂が公表された1939年から、日本で原子力基本法が制定された1955年まで、日本の核開発の実態を丹念に追跡している。日本は国内法で原子力の軍事転用を禁じた最初の国となったが、その裏には基本法に先立って締結された日米原子力協定があった。この2つの枠組みは相互に矛盾し、その中で「民主、自主、公開」という日本の原子力三原則も風化してきた。受賞作は学術的であり、必ずしもジャーナリストイックとは言えないが、今回の原発事故を歴史の流れの中でどう位置づけていくべきかを考える上で重要な手がかりを与えるものとして高く評価した。

(東京大学名誉教授、日本学術振興会理事 浅島誠)

### 賞応募の仕組みに改善の余地

内閣府の「科学技術と社会に関する世論調査」(平成22年1月調査)によると、ふだん得ている科学技術に関する情報源として「テレビ」を挙げた者が87.1%と最も高く、「新聞、雑誌」(58.8%)、「インターネット」(21.8%)、「ラジオ」(12.2%)、「書籍」(9.2%)の順となっている。一方、本年度を含め過去7年間の受賞件数は31件で、その内訳は書籍・雑誌が16件、新聞報道が8件、映像・放送4件、ウェブ関係3件で、世論調査とは逆の傾向にある。これは質の高い科学技術を伝える媒体がふだん接しているものとは逆と見ることができ、推薦者の層が限られていることが大きく反映しているとも見られる。より広い層からの推薦を求めるなど、応募の仕組みを更に工夫をする必要があることを示している。昨年もお話したが、博物館や科学館での展示に関する応募はほとんどない。積極的な推薦を期待したい。

(筑波大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞者 白川英樹)

# 「テラヘルツ波」を分かりやすく伝える

サー・マーティン・ウッド賞受賞 河野行雄氏に聞く

3月の例会は14日、JASTJが後援する科学賞「サー・マーティン・ウッド賞」の2011年度（第13回）受賞者、東京工業大学准教授の河野行雄さんを迎え、受賞研究の「低次元電子系の機能に基づいたテラヘルツ波の検出」について聞いた。今回は、講演の途中で例会参加者に理解できたかどうかを確認し、不明な点を解決してから先に進む「全員参加のクエスチョン・イン・レクチャー方式」で行われた。参加者には、会場入り口で「ニコニコカード」と「ハテナカード」が渡された。司会者が話を区切るごとに、全員がどちらかのカードを掲げ、講演の内容が伝わったかどうか、可視化する試みだ。

## 波長が変われば世界が変わる

講演に先立ち、ミレニアム・サイエンス・フォーラム会長で東京大学名誉教授の三浦登さんが、「日本と英国の科学技術の交流を進める」と、サー・マーティン・ウッド賞を紹介。河野さんの研究がいかにか画期的で面白いのか、「本人が分かり易く説明してくれるはず」と引き継いだ。

その言葉通り、河野さんの話は初歩的な「目で物が見える仕組み」から始まった。テラヘルツ波は、



最後は、ニコニコとハテナが半々くらい

(撮影 漆原次郎)

目には見えないが、可視光と同じ電磁波だ。「光の見え方は反射、発光、透過の3種類。電磁波の検出法も同じです」と、直感的な理解を誘う。1秒間に1兆回ほどの振動を起こすテラヘルツ波は0.1~1 mmの波長で、可視光とテレビ電波の中間だ。「目が光を捉えるのと、携帯が電波を受信するのは同じこと」で、「波長が変われば認識する世界が変わるだけ」という。参加者のほとんどがニコニコカードを掲げた。

## 近接場光で高解像度を実現

後半は、研究成果がもたらす技術革新から研究の詳細へと話が進んだ。テラヘルツ波は、物性研究だけでなく、無線技術、食物や文化財の非破壊検査、医療検診、災害救助など様々な分野への応用が期待されている。



電磁波の基本を説明する河野行雄さん

(撮影 漆原次郎)

空港セキュリティで話題になった「服の中まで見える全身スキャナー」はその一例だ。2005年には国家基幹技術10大戦略に選ばれており、2015年には7000億円以上の市場が見込まれるという。

しかし、テラヘルツ波はエネルギーが低いため検出が難しく、高感度・高解像度・広帯域で検出することが喫緊の課題だった。河野さんは、江崎玲於奈氏が提案した半導体超格子技術を発展させ、カーボンナノチューブなどの「低次元電子系」に電子を閉じ込めて波動性を引き出し、テラヘルツ波の高感度検出に成功した。また、波長よりも小さな穴から浸み出した局在光「近接場光」を利用して高解像度イメージングを実現。二つの技術を直結させ、金属針を組み込んだデバイスで、半導体の中での電子の流れを空間的に可視化する高解像度テラヘルツ波カメラを開発した。

河野さんは「テラヘルツ波を使うと、細胞の集団がどうやって秩序を保って生命活動を支えているのか、生物学上の難問に解を与えられると考えています」と、今後の夢と展望で話を締めくくった。

(JASTJ会員 倉持宏実)

## 重度脳性まひ全症例分析で信頼回復

岡井崇・昭和大学教授が産科医療補償制度の現状を紹介

4月の例会では20日、産科医療補償制度の原因分析委員会委員長を務める岡井崇・昭和大学教授を招いた。岡井さんは分娩に関連して発症した重度脳性まひのすべての症例を分析し、すでに100件を超える報告書を提出している。司会進行役を務めたJASTJ理事の隈本邦彦さんの解説も入り、制度や原因分析の意義を中心に、医療事故の実態にも言及した。

### 産科医療補償制度について

この制度では分娩に関連した何らかの理由で重度の脳性まひになった場合、その新生児と保護者の経済的負担を補償する。補償額は3,000万円。これは過失・無過失問わず一律に支払われる。だが「お金をあげて終わり、ではないのです。医療事故の原因を解明して、事故を減少させることが大事です」と岡井さんは強調した。係った家族への公平な補償と原因解明。これが無過失補償制度の理念だ。

脳性まひが補償制度の対象となったのは理由がある。岡井さんは「まさに訴訟になりやすい典型です」と述べ、次のように説明した。脳性まひとなった子を持つ家族の悲しみは大きい。将来、経済的に負担もかかる。脳性まひとなったケースの50%以上は何らかの賠償を要求され、訴訟率は非常に高い。そのため産科医のなり手も減少している。脳性まひ発生率も一向に減少しない。厚労省では脳性まひのこうした現状に歯止めをかけ、上手くいけば同様の制度を他の領域にも広げたいと考えている。

### 医療事故と刑罰

「医師に刑罰を与えても医療事故は減らない」と、岡井さんは刑罰の弊害を訴えた。

法廷では事故の原因は解明できない。被告である医療者は自分に都合の悪いことは言わないからだ。事故の核心から議論を遠ざけてしまう。また、被告の医療行為が質の低いものでも、係争の過程で許容範囲内のレベルに格上げされる傾向がある。実は鑑定人として呼び出される医師達は、そのほとんどが医師に刑罰を与えることに疑問を持っている。そんな彼らの心理状態が基準を甘くさせるのだろう。いずれにせよ、これでは医療事故の再発防止も医療の



全症例の原因分析で患者家族との信頼関係を取り戻したいと訴える岡井崇さん  
(撮影 西野博喜)

質の向上もままならない。

### 原因分析の意義

原因分析委員会では脳性まひの事例を全て分析し原因を究明する。分析結果は報告書にまとめられ、家族と医療機関側に送付する。また、要約版はインターネットで公開される。「事故原因の緻密な解析をすることで医学的知識が深まり、再発防止の課題も明確になる」。3年間委員長として事故原因を分析した岡井さんの感想だ。

産科医療補償制度がスタートしてから訴訟の状況は変わった。「以前は50%以上、何らかの形で訴訟がありました。それが、こんなに減っています」と述べ、岡井さんは数字を示した。脳性まひ児の家族に原因分析報告書を送付して6カ月以上経っての請求が47件中2件(4.7%)。1年以上経っての請求が20件中1件(5%)だ。実際、これまでの報告書では、損害賠償に相当する医療者側のミスは非常に少ない。「最終的には患者家族との信頼関係を取り戻したいと願っています」。

一方で、制度に反感を抱く人もいる。質疑ではこの話題に熱が入った。一部の医師は自分の医療が責められ、訴訟されやすいとして嫌がっている。岡井さん本人が脅されたり、制度について虚偽の情報が流されたりしたという。「医師が自分たちで評価して正す。その方が医師自身は責められないし、苦しまなくて済む。これが理解してもらえない」。どうやら足を引っ張っているのは同業の医師らしい。関係者の意識改革も必要だ。今後も岡井さんの奮闘に期待したい。  
(JASTJ理事 西野博喜)

## 「金曜講話」が教える 科学コミュニケーションの本質

“健康や安全”を理由に教育現場での実験を省略しないでほしい——このメッセージが、こころに残った。

様々な色の煙、閃光、発色、発臭、そして幾度もの爆発。英王立研究所 (Royal Institution) の階段教室の実験台の上で、化学物質のさまざまな変容を舞台芸術のように繰り広げた“実験講座”。興奮冷めやらぬ聴衆からの質問に答えた講師の言葉が、これだった。

「化学物質には元来、メリットとリスクの両方があるもの。このおもしろさ、大切さは、実験という体験なしには絶対に伝わらないのです」

### ファラデーが始めた市民との“対話”

英王立研究所の金曜講話 (Friday Evening Discourse) は、電磁気学・電気化学の開拓者、マイケル・ファラデー (1791 - 1867) が1826年に始めた、科学コミュニケーションの嚆矢ともいえる試みだ。毎回、選りすぐりの講師が、聴衆の研究所会員やゲストの市民約150人に向けてきっかり1時間、最先端の研究領域をわかりやすく伝える。

専門家相手でも難しい内容を、実験を通してわかりやすく理解してもらい、いかに大向こうをうならせてみせるか。これまでに電磁気学のマクスウェル、フラーレン研究のクロトー博士ら科学史を飾るサイエンティストがこの講師を務めており、日本からは量子物理学の外村彰、カーボンナノチューブ研究の飯島澄男さんらが、この壇上に立っている。

2012年5月25日 (金) には「Free range chemistry: No added chemicals!」のタイトルで、ケンブリッジ大学のピーター・ウォザース博士が講師を務めた。英国のメディアでも「化学物質」はネガティブな文脈で使われることが多いが、消費者が好む「放し飼い (Free



金曜講話で実験するウォザース博士。子供の参加者は鼻を摘んだり、耳をおさえたり。ひとときわ高い悲鳴も……。 (撮影 小出重幸)



王立研究所地下には、科学史を学べる体験コーナーがある。元素周期表のクイズに挑戦する親子連れ。 (撮影 小出重幸)

range)」、「無添加 (No added)」というキーワードにひかれて、友人の会員に聴講への招待をお願いしたのだ。

### 「カンドー」なしには伝わらない

ロンドンの中心街ある同研究所。開始15分前には会場の階段教室に着席し、講師の登場を待つ。8時きっかり、ドレスコードのブラックタイ・タキシードで現れたウォザース博士は、「いつもの白衣とは勝手が違うので……」と笑わせながら、実験台の溶液をオレンジ・ピンク・緑・黄・青など様々な色に変化させたり、消石灰に水をかけて急激な発熱を見せたり、一方では、硫酸銅の結晶を木炭と合わせて加熱し金属の銅塊を取り出すなど、化学がどのように発展し、社会を支えてきたかを、五感をめいっぱい駆使して伝える。もちろん「爆発」も大切なドラマだ。

ニトログリセリンを数滴、ガーゼにたらして「さあ、行きますよ。心配な人は耳を塞いで……」と、これをハンマーでたたくと、「バーン」、階段教室中に響く爆音。聴衆も恐怖と期待を共有しながら、化学物質の世界の魅力を存分に味わうという、恐ろしくも素晴らしい講話だった。

「現象は化学結合が支配し、その結合はすべて電子の働きが支えている。この素晴らしい世界が、カガクブシツなのです」

参加した老若男女は、いずれも毒気を抜かれた表情。これらの過激な実験をすべて授業に導入できるかはともかく、「カンドーした」というひと言無しに化学物質の本質は伝わらないのだ、ということをおぼろげに気がした。

(JASTJ監事、英インペリアル・カレッジ・ロンドン 小出重幸)

## リスク情報共有の難しさ —安全な日食観察活動で感じたこと—

5月21日の日食をどこでご覧になっただろうか？ 天気予報では曇りの地域が多く、雲間を通して辛うじて金環を見たという人も多いだろう。ウェザーニューズの発表によると、7時45分時点で全国の63%で日食が見えたという。金環食は長くても5分程度だが、部分日食を含めると2時間30分を超える現象のため、これよりやや多い7割程度の地域で晴れ間から日食が見えたと考えられる。

### 国民の2割以上が“目撃”か

では、何割の国民が日食を目撃したか？ 1億3千万人×0.7×(0.3~0.5) = 3~5千万人程度だろうか。日食グラスが数百万枚以上売れたことや、書店のブックフェアで日食グラス付き書籍・雑誌が1億円以上売り上げたこと、さらに当日は薄雲のため日食グラスを持たないかなりの人が裸眼で見ていること、日食グラスを複数名でシェアしている場合もある等、推論すると少なくとも3千万人、全国民の2割以上が日食を目撃したことになる。

太陽を観察することは目に障害を生じる危険を伴う。さらに月曜朝の天文現象への関心の高まりは交通事故も心配される。ちょうど百年前、1912年のドイツ日食の際には、3千500人の日食網膜症患者が発生している(\*)。いかに事故を減らすのか、今回、日食を楽しむという科学普及と共に、どうリスクを減らすかという天文分野では珍しいリスク・コミュニケーションが要求された。



21日に三鷹で雲間から撮影された金環日食 (提供 国立天文台)



所沢市の小学校で開かれた観察会で日食を見る子供たち (提供 東原健介)

国立天文台では、1年以上前から天文に関する国内関係機関・団体と協力して、日食に関する情報提供、特に安全な観察を呼びかけてきた。日食現象の全国各地における詳細な予報データを提供するとともに、例えばウェブサイトやメールマガジン、ツイッター、フェイスブックで安全な観察のための情報提供を繰り返し行った。科学技術振興機構の科学コミュニケーション推進本部と協力して、サイエンスウィンドウ誌2012年春号に「日食を安全に観察しよう」パンフレット、映像作品「日食を楽しもう」DVD、さらに日食グラスの3点セットを同封し全国のほぼすべての小・中・高校にも配布した。

### 症状訴えた人の1 / 4分は危険性知らず

一方、今回の日食情報の提供では日本天文協議会2012金環日食日本委員会や日本眼科学会、日本眼科医会も大きな役割を果たした。日本天文協議会は、世界天文年2009の成果を引き継ぎ、日本の天文研究・教育・普及・アマチュア活動が一体となって天文と科学の理解を日本社会に広げるための合同組織だ(2010年9月9日発足)。この協議会の下で行政や組織からの制限を受けずフットワーク良く活動できた2012金環日食日本委員会は、メンバーがボランティア的活動ながら個々に極めてアクティブな活動を展開したことは特筆に値する。ウェブからの情報提供に留まらず、国立天文台等と共同でシンポジウムや記者会見も複数回実施した。しかし、民間の立ち位置で権限無くリスク管理を行うのには限界があったのも事実であろう。

日本眼科学会もポスター配布など熱心に目の安全を訴える啓発活動を行った。同学会が中心となって6月末を期限に、今回の日食で生じた目の障害について調査を続けている。5月末の中間報告では、症状は546例報告されている。このうち、明らかな網膜の異常が20眼にみられたそうである。症状を訴えた患者の1/4は、眼障害の危険性を事前に知らなかったと回答している。メディアからの報道や情報提供の限界を知る数字として、今後のリスク管理や国民の合意形成の上で参考にし、いかに情報を広く適切に伝えるかを検討して行きたい。

(JASTJ会員、国立天文台准教授 縣秀彦)

(\*) 引用文献：尾花明他、2011、日本眼科学会雑誌、115(7)、589-594

## 電子顕微鏡開発に命をかけた外村彰さん

日立製作所の研究所で電子線ホログラフィー顕微鏡の開発に情熱を傾け、日本を代表する科学者の一人だった外村彰さんが5月2日、膵臓がんで亡くなった。文部科学省が始めた「最先端研究開発支援（FIRST）プログラム」の中心研究者として、さらに強力な電子顕微鏡開発に取り組んでいる最中だった。

1982年、IBM産業スパイ事件で日立製作所が大揺れとなった直後に外村さんが記者会見をした。アハラノフ・ボーム（AB）効果を実証したという、基礎科学中の基礎科学



外村彰さんの気さくな人柄には誰もが魅せられた  
(提供 理化学研究所)

の話。記者たちは内容を理解するのに難儀した。私自身、この成果がどれほどのものなのか判断がつかねたが、学習院大学の江沢洋先生が「外村さんのものすごい努力で可能になった実験」と話していたのが印象に残っている。

だが、納得しない物理学者もいた。そこでノーベル賞学者の楊振寧教授のアドバイスをもとに再度実験、86年、文句のつけようがない検証に成功した。AB効果の存在が確かめられたことで、電子を動かす主役はファラデーの時代から馴染みのある「電磁場」ではなく、あまり馴染みのない「電磁ポテンシャル」だと確定した。量子力学の基礎をめぐる論争に終止符を打ったのである。電子線ホログラフィー顕微鏡を開発したからこそその成果だった。

その後も日立で研究を続け、新たな成果を出す一方、日本の科学者を盛り立てる努力も惜しまなかった。その気さくな人柄に、誰もが魅せられた。

実は、JASTJに日立製作所が2010年から賛助会員として加わってくださったのは、外村さんのお力添えによる。おそるおそるお願いしたとき、満面の笑みで「そりゃあ、入らなくちゃ」と言ってくださった様子は、生涯私の心から消えないだろう。  
(JASTJ理事 高橋真理子)

### WEB編集長から

JASTJは、会報「JASTJニュース」のほか、Webページをはじめとしたインターネットでも情報発信を行っています。数回にわたり、これらのインターネットによる情報発信についてご案内します。

#### ■ Webページでの情報発信

JASTJのWebページ (<http://www.jastj.jp>) にはアクセスしておられますか。月例会の案内と報告、JASTJ賞やその他事務局からの連絡など、随時更新しています。

また、トップページ左側には“Pick Up Movie”として、見て楽しめる科学映像や、自然の不思議さを感じる映像をYouTubeなどに公開された映像作品から週替わり（金曜日更新）で紹介しています。これまでに紹介した映像へのリンクもありますので、ぜひご覧ください。

#### ■ Facebookでも発信中！

最近話題のFacebook。気軽に情報を発信できるツールとして、積極的に利用している会員の方も多と思います。JASTJは、Facebookページを開設しています。

Facebookで「日本科学技術ジャーナリスト会議」を検索してください。ぜひアクセスして、「いいね！」ボタンをクリックしてください。

Facebookページには、Webページと同様の情報を掲載しています。今後は月例会前にリマインダーとしても



▲FacebookでのJASTJのページ

役立つように、発信回数を増やします。

Facebookページは、会員と事務局、あるいは会員同士が交流を実現できる場で、会員の方々からのメッセージが増えれば増えるほど、より充実していきます。どなたでもコメントを書き込むことができますので、皆様からのメッセージをお待ちしています。



Webやインターネットに関連した内容で、ご質問やご意見がありましたら、Web編集長まで電子メール ([system.jastj@gmail.com](mailto:system.jastj@gmail.com)) でご遠慮なくお知らせください。皆様からの“Pick Up Movie”の推薦もお待ちしています。  
(Web編集長 藤田貢崇)

# JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2012年6月現在)



宝ホールディングス株式会社



味の素株式会社



株式会社東芝



鷗友学園女子中学高等学校



日本電信電話株式会社



花王株式会社



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



独立行政法人 科学技術振興機構



ノバルティス ファーマ株式会社



株式会社構造計画研究所



株式会社日立製作所



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



三菱電機株式会社



第一三共株式会社



ロート製薬株式会社



NPO 法人 宝塚メディア図書館

賛助会員募集中

## 会員のBOOKS

新刊紹介

## 『アストロバイオロジーとはなにか』

瀧澤美奈子著 (SoftBank Creative・1000円・2012年4月)

この宇宙で地球のほかに生命を宿す星があるのか？それが知りたい疑問にこたえようとするアストロバイオロジー(宇宙生物学)は21世紀に入って活気づいている。欧州や米国の望遠鏡衛星が太陽系外の恒星の周囲に地球に似た惑星を続々発見しているのが、異星人発見への期待を誘う。本書は、そのような探究の最前線をやさしい語り口で紹介している。宇宙に生命の仲間を求めて「新たな知の大航海」に挑む著者のわくわく感が伝わってくる。この価格の新書判にカラーの魅力的な写真や図版が豊かに盛られているのがうれしい。

(JASTJ会長・武部俊一)

## 『原子力大国ロシア』

藤井晴雄・西条泰博著 (東洋書店・定価840円・2012年4月)

ソ連は1986年にチェルノブイリ事故を経験して1991年に崩壊、ロシアが誕生した。ロシアは経済不況下でも原発の新規建設と開発プログラムに取り組み、国内原子力産業のハイテク化を推進して外国企業と積極的に連携するようになった。原発のハイテク化には多額の資金が必要だが、ロシアの現況では資金調達が困難だ。このため、既に軍事面で友好関係のあるアジア諸国に原発を輸出し、資金源にしようとしている。本書はこうしたロシア原子力開発の裏事情も紹介している。

(JASTJ会員・藤井晴雄)

## 『3.11学 地震と原発そして温暖化』

横山裕道著 (古今書院・2100円・2012年3月)

互いに無関係のように見える地震、原発、温暖化が実は密接にかかわっているという観点から「3.11」の全体像を分かりやすく描いた。有数の地震国に50基以上の原発を建設し、福島第1原発事故で温暖化対策に赤信号が灯った日本。温暖化が高じると国内でも熱波や豪雨、洪水などが頻発し、毎年多数の犠牲者が出るだろう。日本は自然災害に強い国造りを行うと同時に、原発抜きでの温暖化対策で世界の模範になるべきだと訴えている。

(JASTJ理事・横山裕道)

## 『宇宙へ「出張」してきます』

古川聡、林公代、毎日新聞科学環境部著 (毎日新聞社・1680円・2012年6月)

国際宇宙ステーションで日本人最長の連続宇宙滞在167日を経験した古川聡さんの「出張報告」。超脱白だった少年時代の思い出に加えて、地球酔いに苦しみ「携帯電話が重い」と感じる帰還後の体験が興味深い。無重力が人体に及ぼす影響を医師の視点で描き、宇宙ファンでなくても楽しめる。

(JASTJ理事・元村有希子)

## ■ 新入会員の自己紹介

## ● 小島 正美 (毎日新聞生活報道部)

20年以上健康や食の問題を追いかけています。最近ではメディア報道の歪みにも関心があります。

## ● 中村 明美 (フリージャーナリスト、元読売新聞記者)

記者として科学報道に携わっていましたがフリーになり、今は科学報道についてのメディアリテラシーに関心があります。貴会で様々な視点を学びたいと考えています。

## ● 早野 富美 (横浜市立大学大学院医学研究科精神医学講座特任助教)

大学院で特任助教をしております。専門は脳画像研究で、主に精神疾患を対象としたMRIによる脳の形態学的研究を行っています。

## ■ 新賛助会員の自己紹介

## ● 鷗友学園女子中学高等学校 (小口幸成、西川邦子)

鷗友学園は府立第一高等女学校の同窓生により1935年創立の私立女子中高一貫校です。校訓「慈愛と誠実と創造」のもと約1500人の生徒が学び、ニュース検定や実験・観察中心の理科教育にも取り組んでいます。

## ● 日本電信電話株式会社 (櫻井義人)

科学技術ジャーナリストとの交流を通し、NTTの研究開発をご紹介する情報発信に努めてまいりたいと思いますので宜しくお願いします。

編集  
後記

▶6月のJASTJ総会で新しい理事と担当が決まりました。この担当変更によって会報編集長の仕事を前任者の大江さん(理事)から引き継ぎました。今回初めて会報の編集に取り組んで、改めて大江さんをはじめ、

これまでの編集長のご苦労が身にしみました。これまで積み上げてきた皆様の努力と成果を汚すことのないよう努力するつもりですので、よろしくお願いたします。

▶今後の会報の編集については、会報担当理事の山本さん、西野さん、それにWEB編集長も兼務する藤田さんと協力しながらやっていきたいと思っています(2ページの「理事一覧」参照)。できるだけ多様な視点と情報を活かし、JASTJのWEBページとの連携も強化しながら、読み応えのある機動的な誌面作りを心掛けたいと思うからです。そうした観点から最も重要だと思っているのは、実は会員の皆様のご協力です。JASTJの活動の主役は会員です。会報の原稿執筆について、積極的なご意見、ご提案を期待しています。どんなご意見、ご質問でも遠慮せず高木(tyuki7581@yahoo.co.jp)までお寄せください。(鞆)

## 編集・発行



## \* 日本科学技術ジャーナリスト会議

Japanese Association of Science  
& Technology Journalists (JASTJ)

〒104-0044 東京都中央区明石町5-15 明凶ビル5F  
武田計測先端知財団内

電話・FAX: 03-5550-7127 Email: hello@jastj.jp

会長/武部俊一、事務局長/引野 肇

編集長/高木鞆生 (tyuki7581@yahoo.co.jp)